

## 病院長就任挨拶

## 「現代の首里城」から「未来の首里城」への道筋を

琉球大学大学院医学研究科感染症・呼吸器・消化器内科学講座 教授 藤田次郎



琉球大学医学部医学科同窓会の皆様におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

平成27年4月1日より、琉球大学医学部附属病院の病院長に就任させていただきました。私が、琉球大学

医学部に赴任して10年、また、岡山大学医学部に入学して40年になる節目の年に、重責を担うことになり、全力で取り組む覚悟しております。

琉球大学医学部は、1981年に第1期生を受け入れて以来、今年3月卒業の第29期生まで2,800名以上の医師を送り出してきました。その多くは沖縄県の医療の第一線で活躍され、県民の健康を守るために働いておられます。沖縄県は、日本本土から遠く離れた島嶼県であるため、県内で全ての医療を完結しなければならないという事情を抱えており、同窓の諸先生方のご活躍は県民の期待するところでもあります。また、離島や本島北部の医師不足にも、対応しなくてはなりません。私は、病院長として、同窓の皆様のご協力をいただきながら、これらの問題に対処していきたいと考えております。

さて、最近の大きな話題として、琉球大学医学部および医学部附属病院の、西普天間移転決定があげられます。現在、構想段階での業者が決まり、関係省庁と調整しながら、さらに具体的なプラン作成に向けて、進んでいるところです。核となる琉球大学医学部および附属病院の移転に加え、重粒子線施設の建設等を含めた、複合的な施設を目指しています。新たな施設は、沖縄メディカルアイランド構想として、県民の皆様にご貢献するのみならず、海外からの医療ツーリズムにも資するものと考えております。観光立県沖縄では、近年海外からの観光客が増加していますが、沖縄県のみならず、東アジアを視野に入れた総合的な医療施

設の建設により、医療のインフラ整備を行うことの意義は大きいと考えています。今後の構想に関して、同窓の先生方のご意見も積極的に取り入れながら進めていきたいと考えています。

私は、病院は「城」であると考えております。琉球大学は、もともと首里城跡地につくられていました。今の西原町に移転するに際し、琉球大学医学部を設計した田村麗丘氏は、「現代の首里城」を設計のコンセプトにされました。皆様ご存じだと思いますが、医学部正面玄関の案内板に、そのコンセプトが記されていますので、その一部をご紹介します。

「琉球大学医学部キャンパスは、本校と独立した首里に近い小高い丘の上にある。東に太平洋、西に東シナ海を望む眺望にすぐれた場所である。沖縄の歴史的砦が首里城とすれば、もともと首里城跡にあった琉球大学は、現代の文化の砦ともいえ、丘の上に立つ医学部を、現代の首里城のイメージで捕らえデザインした。」

私は、新しい附属病院が「未来の首里城」となることを願っております。現在の琉球大学医学部附属病院は、第一内科の初代教授である小張一峰先生が、病院長として開設に尽力されました。「未来の首里城」の実現に向かっている今、私が病院長となったことは、天命であると考えております。皆様とともに、大きな夢を描けるような新病院構想を立案したいと考えております。

施設をはじめとするハード面の整備と同時に、ソフト面の充実も非常に重要であります。言うまでもなく、診療、研究、教育こそ医学部の使命です。大学病院における高度先進医療の提供、基礎研究および臨床研究のための環境整備と人材育成、学生教育および研修医教育のさらなる充実は、今後の琉球大学医学部の発展のために、欠かせないものであります。そのためにも、同窓の諸先生方のご指導、ご支援をこれまで以上に賜りますようお願い申し上げます。